

TOUR DE HOKKAIDO 2006 NEWS

Prologue 2006年9月13日発行

区間個人順位

順位	名前	チーム	タイム
1	盛 一 大	愛三工業	3:12.32
2	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	+0:02.17
3	エリック・ウォルバーク	カナダ	+0:02.24
4	西谷泰治	愛三工業	+0:02.61
5	岡崎和也	NIPPO	+0:02.68
6	アンドリュース・ランドル	カナダ	+0:03.92
7	マイケル・フォード	オーストラリア	+0:04.66
8	ダニエル・マッコネル	オーストラリア	+0:05.17
9	スティーヴン・ワールドリッジ	オーストラリア	+0:05.54
10	ショーン・フィニング	オーストラリア	+0:07.14
11	土井雪広	スキル・シマノ	+0:07.40
12	福島康司	VAN G	+0:07.74
13	田中光輝	愛三工業	+0:08.24
14	ジェフ・シェルトビトフ	カナダ	+0:08.51
15	清水都貴	VAN G	+0:08.52

個人総合時間順位

順位	名前	チーム	タイム
1	盛 一 大	愛三工業	3:12.32
2	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	+0:02
3	エリック・ウォルバーク	カナダ	+0:02
4	西谷泰治	愛三工業	+0:02
5	岡崎和也	NIPPO	+0:02
6	アンドリュース・ランドル	カナダ	+0:03

団体総合順位

順位	チーム名	タイム
1	愛三工業	9:47
2	カナダ	+0:04
3	オーストラリア	+0:05
4	NIPPO	+0:07
5	スキル・シマノ	+0:16
6	VAN G	+0:17
7	ミヤタ・スバル	+0:23
8	マトリックス	+0:29
9	プリストン・アンカー	+0:40
10	鹿屋体育大学	+0:43
11	ドイツ	+0:45
12	韓国	+0:47
13	中央大学	+0:49
14	立命館大学	+0:57
15	北海道地域選抜	+0:57

個人ポイント賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	盛 一 大	愛三工業	10
2	マリウス・ヴィズィアック	NIPPO	9
3	エリック・ウォルバーク	カナダ	8
4	西谷泰治	愛三工業	7
5	岡崎和也	NIPPO	6
6	アンドリュース・ランドル	カナダ	5

Prologue 盛一大(愛三工業)がプロローグ2連覇。愛三工業は4年連続初日リーダー

初日プロローグは旭川市石狩川河川敷で行われ、盛一大が3分12秒32、平均時速46.79kmで2.5kmを走り抜き2連覇を達成した。愛三工業としてはプロローグ4連覇を達成。4年連続で第1ステージでリーダージャージを着ることとなった。

2位以下は4位までが2秒遅れでひしめく大混戦。

昨年ステージ1勝し、ポイント賞を獲得しているマリウス・ヴィズィアック(NIPPO)が序盤に暫定トップタイムの3分14秒台をマーク。

しばらくこのタイムに迫る選手おらず。有力選手たちのタイムは3分20秒前後が続く。

オーストラリア勢は20秒を切るタイムをコンスタントに出す。結果的にマイケル・フォード、ダニエル・マッコネル、スティーヴン・ワールドリッジ、ショーン・フィニングが7位から10位を占める結果となった。

最初にヴィズィアックのタイムに迫ったのは、03、04年度プロローグ優勝者の西谷泰治(愛三工業)だった。もちろん



プロローグ表彰台。左から2位マリウス・ヴィズィアック(NIPPO)、優勝の盛一大(愛三工業)、3位エリック・ウォルバーク(カナダ)

優勝候補に挙げられていて、3分14秒のタイムでゴールするも0.5秒及ばず。さらに1996、2000年ツール・ド・北海道個人総合時間優勝者、現在41歳のエリック・ウォルバークが3分14秒のタイムでゴール。しかし、やはりコンマ差でヴィズィアックに及ばず。1秒以内に3人がひしめく結果となった。

そして、最後から2番目にスタートし



昨年に続きトップタイムを叩き出した盛。この種目を得意とし、この日ももちろん優勝を狙っていた。2連覇のプレッシャーをはねのけ優勝を果たした

た昨年プロローグの優勝者の盛一大が混戦の3人を2秒上回るタイムでゴールし、プロローグ2連覇となった。連覇を期待されていただけにレース後には「ほっとしている」とコメントした。さらに「リーダージャージは一度失うともう戻ってこないと去年学びました。チーム内でこのリーダージャージを守って行きたい。」と話した。

Next Stage 愛三工業は第1ステージ4度目のリーダー防衛に挑戦

いよいよ明日からロードレースのステージが始まる。第1ステージは旭川市の大雪アリーナ前を出発し、当麻町を経てまず鬼頭峠(標高500m)へと上る。そのまま天塩山塊を北上してさらに上紋峠(標高800m)、札久留峠、瀬戸牛峠、天北峠と怒濤のように峠が続く、168.5kmのレースが用意された。フィニッシュラインはJR名寄駅前というロケーションで、大勢のギャラリーが選手の到着を待ち構えていることだろう。

すでにコースの下見を済ませたチームの中には、「上りが終わってからゴールまでの平坦が長く、少人数の逃げは決まりにくい難コース」との声もあり、集団ゴールスプリントになる可能性もある。

今日のプロローグは5秒差に9人がひしめく接戦となったため、この日の展開次第では十分に総合成績が大きく入れ替わるかもしれないからだ。

総合上位に複数のライダーを送り込んでいる愛三工業、NIPPO、カナダなどは集団ゴールでも問題はなだらうが、他のチームは上位チームを含まない逃げを成功させ、プロローグの借りを返したいところ。愛三工業は第1ステージで3年続けてリーダーを失っている。今年こそはリーダー防衛なるか。

明日はツール・ド・北海道の序盤戦で恒例とも言える、各選手たちの熾烈なアタック合戦の成果が楽しいステージなのだ。



今年から毎ステージごとに表彰されることになったU23賞。名前も新たに佐藤杯となった。プロローグでトップに立ったのは村上純平(鹿屋体育大学)